

## それぞれの聖地、それぞれに聖地

矢野幸一郎



### 自己紹介

---

旧日本長期信用銀行で社会人生活をスタート、以降内外の保険、証券各社を経て世界四大会計事務所グループのひとつKPMG FASにて主として金融機関のM&Aアドバイザーに携わる。NY州弁護士資格保有。週末のテニスとスキーはそれぞれ40年超のライフワーク。

### 無所属無資格 サラリーマンスキーヤー

---

小五の初スキー以来、45年にわたって国内外のスキー場を訪問しつづけるサラリーマンです。留学時代や卒業旅行でカナダや米国のメジャーリゾートを歴訪した経験もあるものの、現在では、週末限定という事情もあり、また特に拠点もないことからひたすらロングドライブを繰り返して東日本の各スキー場をほとんど日帰りにて往復します。東京在住ですが奥志賀と八方尾根までは日帰り圏内とし、訪問したゲレンデは70か所ほどになります。が、バッジ等一切の資格保有なく所属連盟もなく、ひたすら友人有志と組成し、当日の道路事情・積雪・天候で行き先を決める文字通り日和見でのツーリング、地縁なく所属なく資格なく拠点なく宿もないが決して止めもしない、林子平風にいえば六無斎スキーヤーです。

ここまで通い続ける羽目に至った、記憶をたどれば、原体験は「水墨画のリアリズム」ということになります。温暖の地浜松で育ち雪国の親戚もおらず五年生まで雪をみたことすらなかった小学生が地元の市主催で新潟に行ったのが人生初のスキー体験。初回はあいにくの雪不足でほとんどスキーを装着した程度で終わったものの翌年小6の秋の日にドナルド・キーン氏の「水墨画のリアリズム」に出会います。日本文学・日本文化研究の世界的権威であった氏が雑誌の対談で「日本に実際に来てみるまでは水墨画は単に非常にエキゾチックな抽象的風景画と思っていたが、日本の雪山の景色をみて実にそのリアリズムに打たれた」というコメントを読み、外人さんからするとそのようなものかと思いつつその冬再び群馬のスキー場を訪れた際、これは確かに、と自ら同様の衝撃を受けることとなりました。以来受験期や留学を挟みつつも休むことなく一貫して、聖地として毎冬スキー場巡礼を始めて現在に至ります。対談が載っていたのは月刊文藝春秋のバックナンバー（三島由紀夫事件特集号）であったので今風にいえばある種の文春砲といえなくもないですね。

## バブル世代・外国人同僚 それぞれの聖地

---

その後大学入学時に「私をスキーに連れて行って」で爆発的な世のスキーブームに際会します。バブル世代の、しかも少子化の現在に比べるとかなり多数の、同年代はむしろこれを原体験としてそれこそ雪崩をうってスキー界に参入してきました。“湾岸スキーヤー”を謳う室内型通年ゲレンデのザウスや“新幹線でいける手ぶらでスキー”のガーラ湯沢等では、最初のリフトに乗るのに、場内に入場するのに優に2時間待っていたころのお話で、各地の有名ゲレンデがディズニーランドのように混んでいた時代は社会人となっても長野オリンピックまで続き、あのときスキー場は確かにある種の聖地であったと思います。

学生・銀行時代の同僚にとっての聖地がそうなら、インバウンドに目を転じてみると、外資系投資銀行時代の華人系の同僚たちはそもそも多くは富裕層の生まれでしたが、彼らにとってたとえば香港やシンガポールでは雪は存在しない気候であり、スキーウェアはおろか冬用のアウターすら本来まったく不要なのですが、非日常感と贅沢感を同時にもたらずスノーリゾートでの雪体験自体が、ステイタスシンボルでありセレブの証であるとして、嬉々として来日しウェアを買い込んでいました。また同じ太平洋地域でもスキーのことのほか盛んなオーストラリア人の同僚にとってみれば、自国は実はNYにもロンドンにも直行便がないほど隔絶した巨大な陸の孤島なので、直行便があり、かつ北米や欧州アルプスの極寒かつどちらかといえば氷に近い雪質とに比べれば、ニセコや白馬の（あくまで比較的には）マイルドな気候下でのパウダースノーは「天国に最も近い島」としての聖地であり、日本駐在は人気があるとも聞きました。

## 若干の提言

国内のスキーブームは皮肉にも悲願の長野オリンピックを経て急速にピークアウトした感があります。またコロナ禍ではいっそう顕著でしたが、近年のスキー場は、かつての盛況を知るものからすれば総じてがら空きとあってよい状況で、年々自らの種族の減少を実感するスキーファンとしては寂しい限りと常々思っておりました。もうヒトもカネも集まらないし知恵が出てくるはずもなし、という諦めモードながらそれでも毎年、平成初期から一向に更新されない各地のスキー場のリフトの支柱を眺めながら通ってきたところ、先日シンポジウムで一緒にいる機会を得て、ご当局・自治体・スキー場経営者の皆様の、それぞれのポジションからの成功体験と提言をお聞きし、ちゃんと知恵者がいて知恵を出しておられるのだと勝手ながら勇気づけられる思いでした。いちスキーファンとしての要望にすぎませんが一助になれば、と思い以下書き連ねます。

## インバウンド外国人の招致： グローバルにみれば近場の聖地として

距離もあり大スケールのスキーリゾートをもつ欧米よりは、より近場からやってくる中華圏などアジアオセアニアが当面のメインターゲットかと思えます。これらの富裕層の外国人は水墨画の山水画にも親しみを持つ教養の深い層と期待され、たとえば「リアル水墨画」の聖地としてキャンペーンを張ればドナルド・キーン氏ならずとも、大いに日本の雪国の山河を愛でもらえる可能性が高いように思います。またたとえば鎌倉観光が若い世代の外国人観光客に人気となるのは実は「スラムダンク」の聖地であるから、日光のいろは坂は同様に「頭文字Dの伝説」の聖地であるから、といった、日本人からすると少し想像を超えたスケールで、外国人からみた聖地効果は大きいものといえます。そうなった際にも、最低限のリゾートのファシリティは要求されるわけではあります。

## 熱狂したバブル世代の呼び戻し： かつての聖地として

もともとが消費性向は高い世代ではあるが同時に最低限の設備ほかへの期待水準も高い世代です。たとえば駐車場で詰め込み主義をとれば、多くは今や大型車高級車に乗る彼らはそれだけでそのスキー場を敬遠すると思われれます。また食事についても、もちろん名物や美食が用意できればそれ自体が誘因とはなりますがそこまでいかずとも、ファミレスのレベルさえクリアすればとはよく聞くとところで、これは観光の促進を志すのであればさして高い目標ではないはずです。また多くは都市部からやってくる彼らにとって、夜も同様に飲食が楽しめる場所は必須であり、この点北米のスキーリゾートは、ビレッジセンターが発展しているか（ウイスラー型）、あるいは志賀でいえばふもとの湯田中にあたる場所に一定の繁華街がありそこに宿泊できる（ソルトレークシティ型、バンフ型）。こうしたセットアップはスノーリゾートを超えた通年型のマウンテンリゾートを志向するうえでも重要なインフラ部分となってくるように思われれます。

## それぞれに聖地

---

訪問してきた70か所各地を思い返すに、一定の手当て・手入れは必要かもしれませんが、なお、単なるスキー場を超えた資質を備えるスキー場も多いように思います。それぞれの資質を活かして、それぞれに聖地になる、そんな日々を待望し、はや季節到来しつつあります今年も、巡礼を続けたいと思います。

**矢野幸一郎** / YANO Koichiro

執行役員 パートナー / Partner | Deal Advisory, Financial Services | KPMG FAS Co., Ltd.

---

1968年生まれ。東京大学法学部を卒業後、旧日本長期信用銀行に入行。

その後米New York大学法律大学院で比較法学修士号を取得。

外資系投資銀行各社を経て2019年KPMG FASに入社、M&Aアドバイザー業務を担当。米New York州弁護士。国内外でのスキー歴45年。